

令和 5 年度

福祉作文コンクール入選作文集

社会福祉法人 久慈市社会福祉協議会

目次

小学校低学年

最優秀作	入いんしているいとこ	侍浜小学校 三年 越戸咲名	1
優秀作	うちのおじいちゃんが元気でいてほしいな	侍浜小学校 三年 下向美優	2
佳作	初めての交りゆう会	侍浜小学校 三年 田村茉彩	3
佳作	はじめてのおわかれ	侍浜小学校 三年 菅原一真	4

小学校高学年

最優秀作	支え合って生きていく	小久慈小学校 四年 内田汐咲	5
優秀作	白杖体験と高れい者ぎじ体験をして	長内小学校 四年 阿保心乃音	6
佳作	総合学習で学んだこと	長内小学校 四年 廣崎心	7

中 学 校

最優秀作	未来の久慈市を思い描いて	山形中学校	三年	田中彩遥	9
優秀作	障がいと共に生きる	山形中学校	三年	清水想花	10
優秀作	忘れても不幸ではない	久慈中学校	二年	高坂千穂	12
佳 作	みんなの居場所	山形中学校	二年	清水川結央	13
佳 作	幸せの数	長内中学校	二年	細工藤由華	15

高 等 学 校

最優秀作	福祉を感じた瞬間	久慈東高校	二年	土畑心海	17
優 秀 作	祖母から学んだ福祉	久慈東高校	二年	熊谷菜摘	18
審査委員の感想					22
応募者・入選者					24
実施要項					26
審査委員					28

小学校低学年の部

*最優秀作

*優秀作

*佳作

最優秀作

入いんしているいとこ

侍浜小学校 三年

越戸 咲名

私のいとこは、入いんしています。三さいのいとこです。私がとても楽しみなことは、少しの時間だけかえってくることです。私がかえってくると、

「さないつしよにあそぼう。」

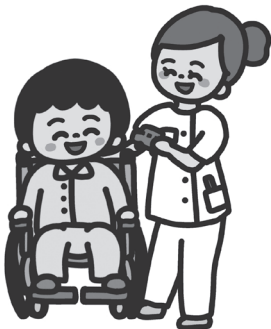
といつてくれて私はうれしくなります。

いとこが家にとまった時に、びょういんのごはんは、きめられた物しか食べられないときいて私はびっくりしました。なので、かえってきたらたくさんおいしい物を食べさせてあげたいです。いとこが好きな食べ物はいとこがえびです。いとこがえびをおいしそうに食べているのを見て、ほっこりした気持ちになりました。いとことおふろに入った時に、いとこは、おなかにきかいをつけているので、きかいが水でながされないように、シールをつけておふろに入っていました。私は、はだにシールをつけるなんて、いたそうだなと思いました。ごはんのあとは、たくさんのお菓をのんでいました。わたしはそれを見て、三さいなのにすごいなあと思いました。私だったら、いやでにげていくかもしれません。いとこは、何かをもらうと、自分より先に、ほかの人にくばってあげます。私は、そんないとこが大好き

きです。わたしだったら、自分のぶんをさきにして、後にはかの人のをくばると思います。

びょういんに帰る日は、私はとても、かなしくなりました。三さいのいとこのお姉ちゃんがなっていて、心がいたくなりました。そのお姉ちゃんは、毎日がんばって生活しているんだなあと思いました。

私のいとこがびょうきなので、しょうらいなんでもなおるくすりをぜったい作って、私のいとこのようなびょうきの子をぜったいなおして、びょうきのない世界をつくりたいです。



うちのおじいちゃんが元気でいてほしいな

侍浜小学校 三年

下 向 美 優

私のおじいちゃんはユートピアのデイサービスに通っています。私は、おじいちゃんが帰って来るたびに、

「おじいちゃん、おかえりなさい。」

と言っています。それにたいして、おじいちゃんは、

「おー。美優やい、ただいま。」

と、言ってくれます。おじいちゃんは、デイサービスから帰ってきたら、デイサービスからの、宿題のようなものを持ってきます。私は、おじいちゃんに、

「おじいちゃん、この問題、教えてあげるね。」

と、言って、おじいちゃんに、宿題のようなものの、問題を教えて、と中ぐらいまでの問題をほかの紙に書いてあげています。

私のおじいちゃんは、もうすぐで、八十歳になります。だから、あと少しで車椅子にも乗るようになると思います。ですから、私はおじいちゃんが車椅子に乗るようになった時は、私が車椅子を押してあげたいです。そして、どんな所でも、車椅子を押してあげて、色々な所につれていってあげて、おじいちゃんをよろこばせたいです。

それから、おじいちゃんは、うちのおばあちゃん、お父さん、お母さん、そして、私と仲がいいです。私は、ときどき、おじいちゃんに、手紙を書いたり、おじいちゃんのびょういんの日をかいてあげたりして、おじいちゃんの手つだいをしています。

私は、おじいちゃんのほかに、おばあちゃん、お母さん、お父さんも、

（ずっとずっと元気でいてほしいなあ）

と思っています。私は、そんなおじいちゃんが、とっても大好きです。だから、私は、おじいちゃん、そして、私のかぞくたちと、いっしょ、いっしょに、くらしていききたいと私はいまでも、思っています。



初めての交りゆう会

侍浜小学校 三年

田村 茉彩

わたしは、たくようしえん学校とのこうりゆう会に行きました。行く前にたくようしえん学校の先生が、どんな子か教えてくれました。その時、車いすの子がいました。

初めて会ったときは、

「どうしてたくようしえん学校にかよっているのかな。」

と、思いました。交りゆう会では、ボッチャをしました。車いすの子は、いたみたいなのを使っていました。私は、言ってみました。

「もう少し左をねらってみて。」

と、言ってみました。そうすると、けっこう近くに行きました。車いすの子に、

「ありがとう。」

と、言われました。言われたときに思ったことは、やっぱり人を助けてあげるってとても気持ちいいなと思いました。そして、助けてあげてよかったなと思いました。わたしは、どうしてたくようしえん学校に行っているのか、分かりました。それは、苦手なことやしょうがいがあるからだと思います。たくようしえん学校との交りゆうをしてまなんだことは、苦手なこ

とがあってもあきらめないでがんばることです。分かったことは、たくようしえん学校の先生は、子どもたちのために、いろいろな工夫をしていることです。そして、人を助けるといいことがたくさんもどってくることです。帰るときに、車いすの子に、

「てつだってくれてありがとう。十月もあそぼうね。」

これからは、しょうがいのある人やおじいさんや、おばあさんたちにもやさしくするようにしたいです。また、十月に交りゆう会があるのでまたてつだってあげたいです。



はじめてのおわかれ

侍浜小学校 三年

菅原 一真

一昨年ひいおばあさんがなくなりました。その前の日は、とても元気そうで、なくなったとれんらくされたときは朝ご飯を食べていた後で、少しの間、動けなくなりました。どんなに元気で、きゆうになくなってしまふということが分かりました。

じゅみょうでなくなってしまうのは、ぼくもみんなものです。みんなさい後には、なくなってしまうことを知りました。むかしは、生きるのもたいへんだと聞いて、今を大切にしたいです。ぼくが死ぬ時期は、できるだけ長生きしたいです。なぜなら、死ぬと友だちと会えなくなってしまうからです。ぼくは、一度きりの人生を楽しみたいです。

ひいおばあさんがいなくなつてからさびしくなったりいのちがとつてもだいいじなんだなあとだんだん思ってきました。いのちを大切にしたいです。

ぼくは、おさないころいしゃになりたいと思っていました。いしゃは地味な仕事だと思っていたけど、とても大事な仕事なんだなあと思いました。ぼくは、まだこうゆう仕事につきたいと思ったことはないけど、いしゃになつてみたいなあと思います。

した。

ぼくは、一度きりの人生を人のためにこれからつくしたいです。目指す人は、フロレンス・ナイチンゲールのように真心をこめて人をしあわせにできるようにがんばりたいです。

ぼくは今まで、いろんなおわかれがあります。だけどぼくはこれをせいちようできるチャンスだと思っています。おわかれでもいつまでもウジウジしないで身を守ってくれているんだと信じて前に進みたいです。一度きりの人生を楽しみたいです。人のためにすごしてさい後やりきったと思えるような人生にしたいです。

みなさんは人生を楽しめていますか。



小学校高学年の部

*最優秀作

*優秀作

*佳作

支え合って生きていく

小久慈小学校 四年

内田 汐 咲

私には九十六才になるひいおばあちゃんがあります。

今は家で生活しながら、週四回のデイサービスに通って、ごはんを食べたり、お風呂に入ったりしてすごしています。ひいおばあちゃんは、とても元気で、おしゃべりが好きです。耳が遠いので、大きな声で話しかけないといけません、ゆつくり大きな声で話しかけて、楽しくおしゃべりができています。

今、ひいおばあちゃんは元気ですが、もつと年をとって、歩けなくなったらどうしよう何だか心配です。また、耳も遠いので、いつ耳が聞こえなくなるか不安です。

この間、学校で「福祉出前こう座」を受けました。「福祉」というと、お年よりに関わることなのかな、というくらいに考えていました。実さいは、しょうがいがあってもなくても、生活が不自由に感じている人たちを、社会全体でサポートして助け合っていくことが「福祉」だということを学びました。

「車いす体験」では、足が不自由な人が足のかわりに車いすを使うことによって、移動できることが分かりました。もし、ひいおばあちゃんが歩けなくなっても、車いすを使って家の周りをさん歩したいなと思いました。それから、ひいおばあちゃん

んは、見た目ではわかりませんが、心ぞうにペースメーカーを入れていきます。今は、自分でカートを押して、ゆつくりですが、行きたい場所に行けます。足こしが弱っても、車いすなら心ぞうに負たんがかからなくて安心です。ただ、車いすは、一人ではおけません。そのため、家族の力が必要です。私たちができないことは、地域や社会の人たちにお世話になることがあるかもしれません。これも「福祉なんだなあ」と思いました。

また、目の不自由な人の気持ちをを知ることができた「白杖体験」でも、サポーターや道具の力がないと、とても危けんだと感じました。アイマスクをすると目の前が真っ暗で、声や音以外は、杖の感じよくでしか進めません。私は、サポーターの肩をさわっただけで安心しました。

この二つの経験から、人は助け合って生きていることを改めて知りました。そして、「福祉」を身近に感じる事ができました。

私は、ひいおばあちゃんとの生活や「福祉出前こう座」から、しょうがいがあってもなくても、人はおたがいに支え合い、おぎない合って生きていることを学びました。これから、こまっていることに気づき、進んで声をかけたり、行動にうつしたりして、人を助けられる大人に成長していきたいと思っています。

白杖体験と高れい者ぎじ体験をして

長内小学校 四年

阿 保 心乃音

わたしは、学校の授業の中で、白杖体験と高れい者ぎじ体験をしました。

白杖体験では、どこになにがあるのかが分からなくて、とても大変でした。特に、階段の上り下りが大変で、ふつうのろう下でも段差があるところはこわかったです。白杖を持っている人を見かけたら、

「何かお手伝いすることはありませんか。」と声をかけたいです。

高れい者ぎじ体験では、足と手首に重りをつけて体験をしました。その他に、目にはゴーグルをかけ、耳にはヘッドフォンをして、三つの体験をしました。

一つ目は、新聞を読む体験です。新聞には、文字や写真があり、大きい文字や色付きの大きな写真などは少し見えました。しかし、新聞に書かれている記事の内容までは読むことができませんでした。

二つ目は、色を見分ける体験です。明るいオレンジ色や赤色などは見えやすかったですが、暗い色である青や黒やむらさきなどは、どれも同じ色に見えました。黄土色とオレンジ色も見

分けがつかなかったです。色が見えないということは、生活の様々なところで困ることが多いなと思います。

例えば、道を歩いていて信号の色が見えなかったり、料理をしていて食材に火が通っているかが見えにくかったりすると思います。そうになると、命に関わることにつながってくるので、周りの人の助けが必要なんだなと思いました。

三つめは、手ざわりだけでお金を出す体験をしました。お札は分かりやすかったです。むずかしかったのは、五十円玉と五円玉の区別です。どちらもあながあいているので、集中してさわらないと分かりませんでした。買い物などをして、お年よりの方がお金をはらうときに時間がかかっても、ちゃんと待つてあげられる人になりたいです。

高れい者の方や様々なしやうがいをもっている方は、わたしたちよりたくさん大変な思いをしているのではないかと思います。今回の体験で、体が不自由な方やしやうがいをもっている方の生活について、もっと知りたいと思いました。本やインターネットなどでたくさん調べて、自分に何ができるかを考えてみたいです。

そのために、大変だなとか困っているだろうだけでなく、相手の気持ちを理かいることが大切だと思います。相手によりそって、いっしよに考えたり助け合えたり出きれば、学校の総合学習で学んでいる「みんながかがやく社会」に近づくとあります。そんな社会になるように、これから勉強をがんばります。

総合学習で学んだこと

長内小学校 四年

廣 崎 心

わたしは、学校で白杖体験と高れい者ぎじ体験をしました。

白杖体験では、アイマスクをつけて白杖を持って学校の中を歩きました。アイマスクをつけて、いつも歩いているのかや階段を歩いてみると、自分がどこを歩いているのか全く分かりませんでした。友達に支えてもらったり、声をかけてもらったりして、やっと歩くことができました。とても一人では歩くことができないと思います。自分がアイスマスクをして体験するのも大変でしたが、友達を支える役も大変でした。見えていることを見えていない人に伝えるのは、とてもむずかしいです。

右や左などはすぐ言えますが、階段であと何だんかを伝えるのがむずかしかったです。ちよつとした段差でも、すぐ気を付けて歩かないとあぶないんだなと思いました。

もし、自分や家族が白杖を使うことになったら、この時に学んだことをしっかりとできるようにしたいです。

高れい者ぎじ体験では、体におもりをつけて体験しました。年をとると、思うように体が動かなくなることがわかりました。

また、関節が曲がりにくく思うように体が動かなかったり、

時間がかかったりするんだなと思いました。耳も聞こえにくくなるし、目も見えにくくなるそうです。そうになったら白杖の時間と同じで、だれかに支えてもらうことが大切だと思います。お金を出す体験や色を当てる体験をして思ったことは、時間がかかるということです。全く見えないわけではないので、よく考えたり、よく見たりしました。とても体力が必要です。だれかが待っていると思うとあせったりもします。そこで大事なことは、待つてあげることだと思います。それでも大変そうにしていたら、

「何かできることはありませんか。」

と声をかけたいです。初めから声をかけるのではなく、本当に相手が助けを必要としているのかを考えることも大切です。実さいにできるかは、その時になってみないと分かりませんが、困っている相手を助けてあげられる人になりたいです。





中 学 校 の 部

* 最
優
秀
作

* 優
秀
作

* 佳
作

未来の久慈市を思い描いて

山形中学校 三年

田 中 彩 遥

「情けは人のためならず」ということが私は大好きだ。ことわざとは、昔から言い伝えられてきた教訓である。私は以前、この言葉を「親切にするのはその人のためにならない」という意味だと誤解していた。しかし、本来の意味を知ったとき、とても衝撃を受けた。「人に親切にすれば、相手のためだけでなく、巡り巡って自分に戻ってくる」という意味だった。これはまさに、見返りを求めないボランティア精神と通ずるものがあるのではないかと考える。

中学校最後の夏休み。私は挑戦しようと思っていることがある。それは、ボランティア活動だ。「くじ☆ラボ」という環境整備活動に参加することである。

私の生まれ育った山形町には、日本一の白樺美林として有名な平庭高原がある。しかし、平庭高原の白樺は高齢化が進み、強風や雪害による被害が相次いでいる。小さい頃から見慣れた平庭の白樺が一本また一本と倒木していく姿を見るたびに心が痛んだ。そんな時、ここ数年先輩方が中心に活動していた植樹に参加することになった。久慈市の花鳥木として知られる白樺は、木としては短命であるそう。人生百年といわれる近年、

白樺は八十年。自生が進まず人間の手を必要とする状態にある。そこでボランティア活動が必要となってくる。その活動に参加できることに私はうれしさを覚えた。久慈市のために中学生の私が役立つことができるのだ。

私がボランティアについて、考えを深めたのは、学校で取り組んでいた「赤い羽根共同募金」などの募金活動だ。その時も同じような気持ちの高まりを感じた。児童会や生徒会に携わる一人として、誰かのために自分ができることをしたいと思う気持ちだ。

「募金にご協力ください。」

自分の思いを声に乗せ、何度も何度も呼びかけた。取り組み期間中には、たくさんのお金が集まった。この集まったたくさんのお金にはいろいろな人の思いが詰まっていた。困っている人の役に立ちたいという思いやりの心を強く感じた。大切なお金を届けた際、

「このお金を、困っている人のために役立ててください。」

と大切に渡した。この時、今まで以上にお金の重みを感じた。それは、たくさんのお金のおもいやりだったのかも知れない。市役所の方の、

「必ず役立てます。ありがとうございます。」

という言葉聞いて、ボランティア活動の大切さを改めて感じた。活動を始めたころは正直、友達がやるならやろう、先生に言われたからやろうという気持ちが少なからずあった。しかし、この活動を通して、困っている人のために自分から行動し

たいと思うようになった。私は、ボランティアを通して大きく心を動かされた。人に親切にすることは、相手のためだけでなく巡り巡って自分のためにもなることを実感することができた。それは、自分の利益ではなく、人や社会、自分について新しく気づくことができ、人とのつながりを広げることができ。私の心の成長につながるものである。今から十二年前に起こった東日本大震災の時、私たちのために募金をしてくれた人がいるから今、幸せに生活できていることも忘れてはいけなと感じた。

どのボランティア活動でも目指すべきことは一つ。それは、自分の心の成長につながるボランティア精神を後世に残していくことである。そのために、今自分のためにできることを考えて行動することが大切である。私たちが愛するこの山形を、そして久慈市をボランティアの力で変えていきたいと思う。



優秀作

障がいと共に生きる

山形中学校 三年

清水 想花

障がい者という言葉から、みなさんは何を考えますか。私は今まで、自分には関係ない世界だと思っていました。身近に障がいを抱えた方がいないという理由だけで、私は福祉について深く考えてきませんでした。

しかし、身近に感じることになったきっかけがあります。それは二年生の時に行った職場体験です。職場体験とは本来、その職業や働くことについて知るものですが、私にとってこの体験は、障がいや福祉について深く考えるきっかけとなりました。職場体験は三日間かけて行われます。私は保育園が職場体験の場所でした。毎日違う年齢のクラスに行き、子ども達とふれあい、保育士の体験をさせていただきました。そこで私が出会ったのは、耳に補聴器をつけた男の子でした。体験の二日目は、私とその男の子のクラスの担当でした。どのように接すればよいか分からず、家に帰り、接し方や障がいについて調べました。そこで目にしたのは、障がい者が差別を受けているという現状でした。調べたものの中には、この男の子と同じように補聴器をつけている人の話もありました。この方は耳が聞こえない人のことを指す差別語で呼ばれたり、体操服や教科書、大

切な補聴器まで隠されたり、捨てられたりするなど、同級生からのいじめに苦しんでいました。この方他にも同様の問題は多く取り上げられていました。障がい理由にいじめがあるという事実には心が痛みました。結局、どのように接したらよいのか明確な答えが出ないまま、その男の子のクラスでの職場体験の日を迎えました。しかし、教室に入った途端、私が感じていた不安は一瞬のうちに消えてなくなりました。なぜなら、その子が他の子と同様に笑顔を見せて生活していたからです。その男の子は私にも自分が好きなキャラクターを紹介してくれたり、一緒にブロックで遊んだりしてくれました。障がいを感ぜさせないくらい元気に、とても楽しそうな表情で過ごしていました。

この体験を通して、障がいを受け入れてくれる人の大切さを感じました。きつと小さい時から、この男の子のように障がいを持った友達が近くにいると、自然と接し方を理解し、どう向き合っていけば良いかが分かると思います。これにより、障がいを持った人も差別を受けずに安心して生活することができず。障がいを抱えている人も、支える人もお互いを尊重できるようになると思います。

日本では十六人に一人が体や心の機能に障がいがあると言われています。その障がいは実に様々ですが、障がい者やその家族だけが乗り越えていかなければならない問題なのでしょうか。私はその人達だけの問題ではなく、社会全体の問題として取り組む必要があると思います。私は福祉について考えると、

他人事という言葉が浮かんでいました。しかし、職場体験での保育士の方や周りの子ども達が理解や温かさをもって男の子を支えている姿を見ました。そして、その男の子が友達と笑い合い楽しそうに生活する姿も見ました。私もこの輪に入りたいと強く思いました。

皆が住みやすい社会にするためには、社会的な取り組みも必要です。アメリカでは障がい者や高齢者が生活していく上で、障壁となるものを除去するというバリアフリー、そして全ての人達が生活しやすいように設計して作られるユニバーサルデザインの考えが進んでいます。日本でも始めていますが、たくさん取り入れていくことが大切だと感じました。もちろん、私達の思いやりや視野を広げることも大切になってきます。障がいを持った方と積極的に触れ合うことで、その方々が直面している問題を知ることが出来ます。これからは一人ひとりが自分ごととして、福祉について考えることが必要になります。全ての人々が住みやすい社会を目指して、これから考え、実行していきたいです。



「忘れても不幸ではない」

久慈中学校 二年

高坂 千穂

「本当の幸せ」とは何だろうか？私はよくこの事について考える。小さい頃は、好きなことをしている時、旅行している時など非日常的な事をしている時だと思っていた。しかし、最近はいくら考えても、最終的に「普段の日常生活を楽しく平和に過ごすこと」という考えにたどりつくようになった。

人は死なない限り必ず年をとる。そこで、もしも家族が年をとって様々な事を忘れてしまうことが増えたとしよう。その時、家族が日々幸せを感じながら楽しくすごすことができるかは、私達の接し方で良くも悪くも簡単に変わってしまうのではないか。

七月七日、学校で「認知症講座」が開かれた。それは、老人ホームの理事長さんや市の認知症の人と関わる仕事をしている方に、認知症になった人との正しい接し方を教えてもらうものだ。他にも、クイズをだしてもらったり、老人ホームでのおじいちゃん、おばあちゃん達の笑顔がたくさん写っている写真のスライドショーなどみせてもらったりした。たくさんのお話を聞かせてもらった中で、私が心に残ったのは、「忘れても不幸ではない」という言葉だ。その言葉を聞いた時、過去の記憶が

蘇ってきた。

私が、たしか小学四年生か五年生の時のことだ。最近もの忘れが多いなと思っていた私の祖父が認知症と診断された。「アルツハイマー型認知症」というらしく、認知症の原因として最も多く、ゆっくり時間をかけて進行していくそうだ。症状は、主に最近の出来事、時間、場所、人物などを忘れやすくなる事だ。だが、初めの頃は母に祖父が認知症になったと伝えられても、実感がなかった。実際に祖父に会っても自分の名前も家族の事も覚えていた。それに少し忘れたとしても小さな事で、それ以外はいつも通りだったので、認知症ということあまり考えずに接していた。

しかし、その「いつも通り」は長続きしないものらしい。私はその頃、週に一回、間があいても二週間に一回は祖父に会いに行っていた。祖父は会うたびに少しずついろんな事を忘れてしまっているように感じた。今、考えたら仕方ないことだと思う。だが、その頃の私は祖父が少しずつ忘れてしまうことにイライラしていた。それには、もし自分も忘れられたら……という不安もあったかもしれない。そして祖父に対して冷たい態度もとっていた。でも会うとき必ず祖父は、うれしそうに笑顔でむかえてくれた。

ある日、祖父が私に小さい紙を渡してきて、名前を漢字で書いてふりがなをふってほしい、と言った。言われたとおりにしたけれど、何でそんな事を要求するのかその頃はわからなかった。その後、認知症が進んだ祖父は病院に入院し私が小学五年

生の秋、肺炎になり亡くなった。母によると私が名前を書いて渡した紙は、祖父がいつも服のポケットに入れて、忘れないように見返していたらしい。今、思い出しても、あの頃もつと優しく接していたら、と悔しい気持ちになる。

認知症講座で教えてもらった事の中に、「三つの『ない』」というものがある。一つは「おどろかせない」二つ目は「急がせない」そして三つ目は「心をきずつけない」というものだ。私は勝手に祖父に対してイライラした気持ちや、かわいそうという気持ちをもっていったのだと思う。だが認知症講座でみせてもらった認知症のおばあちゃんやおじいちゃんはみんな幸せそうに笑っていた。認知症になったとしても幸せにすごせるかどうかは周りの人の接し方で変えられると知れた。

この経験は自分が介護の仕事に興味をもつきっかけになった。少子高齢化が進むことで認知症になる人も増えるかもしれない。もしそうなったとしても、誰もが幸せでいられるように、多くの人が日常から思いやりの気持ちをもって後悔のないように生きてほしい。



佳作

みんなの居場所

山形中学校 二年

清水川 結 央

最近、虐待によって子どもが亡くなったというニュースをよく目にする。私と同じ位の年の子や、それよりもっと小さな子ども達が、虐待を受けていたと聞くと心が痛む。しかし、私はその親も実は何かに追い詰められ、その行き場のない思いが子どもへの虐待という悲惨な行為につながってしまったのではないかと考えることがある。その原因には、育児の大変さの他に、仕事でのストレス、金銭的な問題など、様々なことがあると推測される。

私たち子どもには、「生きる権利」「育つ権利」「守られる権利」「参加する権利」がある。私は、全ての子ども達がこの権利のもと、人らしく生きるためには、子育てしやすい環境を整えるべきだと思う。子育てという二十四時間の重労働を行っている保護者を支えるための環境作りが大切なのだと思う。例えば、親が仕事をしていなくても預けられる保育施設、子どもが体調を崩したときに休みやすい職場の環境づくり、更に医療費の助成や雨の日でも子ども達が遊べる施設の設定など、挙げればきりが無いが支える手段は様々あると思う。これらが充実すれば親の負担が減り、大人もゆとりを持って子どもと接する

ことができるのではないだろうか。

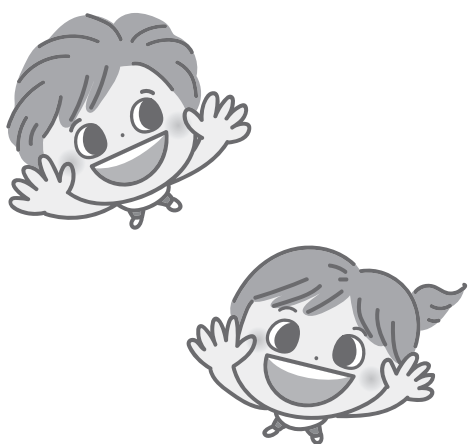
私が住む山形町には、0歳から通える保育園はない、学童もない、小児科もない。だから、不便さを感じている人は多いと思う。私が小学校の頃、遊具がある場所といえば学校だけであつたので、学校や家の周りでしか遊ぶことができなかった。自然豊かで広い山形に公園ができれば、きつと多くの友達と楽しく遊ぶことができ、面白いだろうなあとよく考えていた。

兄弟がかよっている小学校では、学童が必要かどうかPTAアンケートを取っていた。結果として、「利用したい」「今は子どもが大きくなったから使わないが、小さい頃にあつたら利用したかった」など、学童が必要であると考えている親が多かつたようだ。私の家はすぐ近くに祖父母の家があり、弟達は学校から帰ると祖父母の家で宿題をする。だから学童が欲しいと思つたことはなかつたが、困っている人はたくさんいるのだと気づいた。学童としての場所や人員の確保は難しく、すぐにはどうにもならないが、将来学童のような子どもの居場所ができれば安心して小さな子どもたちと暮らせると思う。

岩手県内では「放課後学校」として、子どもの居場所を確保する取り組みをしている自治体がある。ここでは、安全で豊かな放課後を実現するために活動しているそうだ。地域の人が、学校では教えてくれない様々なことを、積極的に教えている。このような取り組みは、やはり地域の支えがあつてこそ成り立つのだと思つた。友達と宿題をし、遊び、ご飯を食べて帰る。こんな環境があれば、子どもだけではなく、親も、地域の人に

も居場所ができて、みんなが幸せになれるのではないかと思う。

十数年後、私が親になるかもしれないとき、どんな山形になつていれば安心して、子ども達と暮らせるだろうか。緑あふれる自然豊かな中に、大きな公園があり、子ども達の笑い声が響いている。近くにはお年寄りも通える病院や、面倒を見てくれる保育園がある……そして、やはり必要なのは頼れる人が近くにいるということだ。放課後学校のように、子どもの居場所を作つたのは、何よりもその地域に住んでいる大人の方々の、地域の子どもの守りたいという想いだった。みんなの居場所をみんなで作っていくという想いを大切にしていきたい。住みやすい地域を作るためには、人との繋がりを大切にし、地域全体で支え合っていく必要がある。私は今、そして未来のためにも、地域の行事に参加するなどし、色々な人と積極的に関わり合い、地域の人との繋がりを大切にしていきたい。



幸せの数

長内中学校 二年

細工藤 由華

私は、世の中で「幸せの数」は無限にあると思います。今、日本だけでなく、世界では幸せではない人や恵まれない人がいます。しかし、それは生活の仕方が少し違うだけで、私たちが勝手に「恵まれない」と決めつけているのではないでしょう。私は、考え方をほんの少し変えてみるだけでもっと楽しく幸せに過ごせるようになると思います。

私の妹は、自分の気持ちをコントロールするのが少しだけ難しい軽い心の病気です。しかし、妹は「病気」ではなく、普通の小学生だと思っています。少し嫌がってしまう時もあります。が、しっかり学校にも行きますし、友達とも遊びますし、沢山食べ、運動もします。普通の小学生と変わらない生活をしていきます。

それなのに私は、妹と外を歩くことを恥ずかしく思っていることがあります。自分が人見知りだということもあり、家では一緒に遊ぶのにも関わらず外に出ると周りの目が気になって妹と歩くことができませんでした。

そのことに気付き、悩んでいるとき一冊の本に出会いました。その本は、生まれつき顔に障害がある一人の男の子が家族

やクラスメートから支えられながら学校生活を送っていく物語です。この本に次のような会話がありました。

母「今日はなにかあった。大丈夫だった。」

子「大丈夫。楽しかったよ。ほんとだよ。」クラスに馴染めない息子のことを心配している場面の会話です。この本を読んで私は自分の感情をはっきり伝えられるのは人間だけであり、相手を思いやる心は人を支えられると気づきました。妹は、学校で友達に手を出すことがあったり、みんなと違う危険な行動を取ってしまったことがあります。もちろんそれは悪いことなので、叱らないといけないことです。しかし、善い行いだと思つての行動ではないと思うのです。どうしてよいかわからない結果が、このような行動になっているのではないでしょう。この考えを持つてから、頭ごなしに叱るのではなく、妹の「気持ち」を大事にして向き合つてあげようと思うようになりました。

「幸せ」とは、どのような状態になれば幸せだといえるのでしょうか。この地球上には沢山の人々がいます。そして、人の数だけ考えや想いがあります。まったく同じ考えを持つ人がいないように、人の数だけ「幸せの数」はあるはず。例えば、貧しい国で立派な衣服を着ることができない人がいると思います。この人に対して「かわいそう」と考える人もいます。しかし、私は「かわいそう」とは思いません。なぜなら私がその立場であつたなら、「かわいそう」などと思われたくないからです。小さい時から、母に「自分がされて嫌なことは

人にしてはいけない」と教わりました。一生懸命生活している人に対して「かわいそう」と思うことは相手の「気持ち」を考えていません。相手がその生活に満足しているのであれば、その人は「幸せ」だといえるのではないのでしょうか。

私は妹と一緒に歩くことは、もう恥ずかしくありません。人の目を気にすることなく、妹と毎日を生活できるだけで私は幸せです。私たちに他の人の幸せの形を決めつけたり、奪ったりする権利は無いのです。世界からどんなものが無くなったとしても、人が想いやる心を忘れない限り「幸せ」はなくならないと思っています。いじめ、虐待、障害、差別、災害、戦争。この他にも世界には沢山の問題があります。しかし、どんなに辛くても必ず、絶対に人の心が世界を温かくしてくれると信じています。

この世界に「幸せの数」は無限にあります。世界に幸せの花が咲きますように。



高等学校の部

*最優秀作
*優秀作

福祉を感じた瞬間

久慈東高校 二年

土 畑 心 海

ある日、私は体験した。いつものように朝、学校に行く準備を済ませ、いつものように電車に乗った。その日は珍しく満員電車だったが、なんとか一番前の席を見つけて座った。車内ではいちもどおりスマホをいじっていた。数十分が経ち、ある駅でおじいさんとおばあさんが乗車してきた。おじいさんは杖をついていて、入り口から近い私の席に近づいてきた。私は「どうしよう、席を譲った方がいいのかな」「でもずっと立っているのは嫌だな」と心の中で葛藤していたが、「どうぞ」と声をかけ、席を譲った。人生で初めて席を譲った経験だった。周りの視線が気になって、誰も見ていなければいいなと思った。同時に、学校まではまだまだ、もう少し座っていたかったなとも思った。おじいさんとおばあさんは私が降りる駅の一つ前の駅で降りた。その際におばあさんから「ありがとうね。」と声をかけていただいた。この一言で、私の心の中の葛藤は一瞬で晴れ、席を譲って良かったと思った。「ありがとう。」の一言の重みを実感した瞬間だった。

このことがきっかけとなったのかもしれない。私が通う高校は二年次から希望する系列を選択する総合学科である。私は迷

わず介護福祉系列を選択した。介護福祉系列を選択した理由は、系列選択の際に人と関わる機会が非常に多い系列だと言われたからである。積極的に人とは話すことは苦手であるが、やりがいがある、そして「ありがとう」をたくさん言ったり聞いたりできると思ったのだ。

介護福祉系列に所属し、勉強を進めるうちに、よくSNSで福祉に関する動画を視聴するようになった。動画を視聴していて気がついたことは、暴力や虐待といった心が痛くなる内容ばかりではなく、地域住民同士で協力して町おこしをしている動画、ボランティアに若い人が積極的に参加して高齢者を救う動画、ご飯が食べられない子どものために子ども食堂を運営する動画などが多くあり、心が温かくなった。私の身の周りでも、人知れず誰かのために行動し、誰かの支えになっている人がきつといる。私も誰かが生きるための力になりたいと考えるようになった。

私は先日、介護福祉系列の福祉現場実習で七日間の高齢者施設実習を体験した。認知症の方が多く、要介護度が高い方が多かった。私が最初に困ったことは、利用者の方とどのようなコミュニケーションをとればいいのかということだった。職員の方からは、事前の打ち合わせで、全員認知症があるため、同じことを話したり、話が噛み合わなかったりすることがあるが、気にしないで話をするようにアドバイスをいただいた。そのお話を伺っているうちに私の実習に対する不安は一気に高まったが、実際に実習が始まり、利用者の方にお会いした瞬間に、そ

祖母から学んだ福祉

久慈東高校 二年

熊 谷 菜 摘

の不安はかき消された。みなさんが笑顔で、こちらが驚くくらい明るく出迎えてくださったからだ。実習中も利用者の方々に支えられ、いろいろなお話をしたり、昔のことを教えてもらったりした。私ができないことを手伝ってあげる、というイメージでいたのに、実際は私の方が助けられていた。高齢者だから、認知症だから、という思い込みだけで接するのではなく、まずこの方はどういう方なのか、何が得意でどのような思いがあるのか、という一人ひとりを理解しようとするのが大切だと教えていただいた。介助をするたびに「ありがとう」と声をかけていただき、私もそう言っていたくたびに「ありがとう」が溢れます」と返した。「ありがとう」が溢れた実習となり、介護の面白さ、やりがいを感じることができた。

私たちは、普段から自分の気づかないところで多くの人たちに支えられて生きている。誰かに助けてもらった分、別の誰かのためになるような声かけや行動ができるようになりたい。「ありがとう」と言っていただけに、私自身が「ありがとう」ときちんと言葉に出して伝えていきたい。福祉には「しあわせ」という意味があるという。福祉を感じる瞬間が社会に溢れていくように、福祉の力で人々の生活が豊かになるように、私には何ができるのか考えていきたい。

みなさんは、認知症の方は何を考えているのだろうと考えたことがありますか。大体の人は何もわからなくなり、何も考えていない、考えることができないと感じると思います。私も最初はそう思っていました。しかし、あることをきっかけに考えが変わりました。

私が小学校六年生の頃、大好きな祖母の様子がおかしいと気づきました。何度も買物に出かけ全く同じものを買ってきたり、夜中なのに出かけようとしていたりしました。病院で診断されたのは若年性アルツハイマーという病気でした。

祖母のアルツハイマーの進行は想像以上に速く、私たち家族に対して攻撃的な態度もとるようになりました。夜中、私たちが寝ていると、一階にいる祖母の叫び声が聞こえました。「通帳がない。返せ、殺してやる!」「今すぐお金をおろしてこい!」など、時間なんて関係なしに数分おきに叫んでいました。目つきも変わり、見たことのない祖母の姿に変わっていました。それが毎日続き、当時受験生であった私にはとても苦痛でストレスでした。また、祖母の攻撃的な態度に対し、どのような声かけを行うべきかわからなかった私も家族も、祖母に対

してすべてを否定するような反抗的な態度をとってしまいました。今だから言えることですが、私たちのこの行動でさえも病気を悪化させていたと考えると、もう少し違った接し方で祖母を落ち着かせることができたのではないかと思います。

その後も祖母の症状は悪化が続き、近所の方にも迷惑をかけ、警察沙汰になることも増え、最終的に祖母は自殺を図ろうとしていました。泣きながら何もかも自分ができないことが悔しいと話しており、このことをきっかけに、認知症は何も考えられないのではない、感情はしっかり残っていて、不安や恐怖を抱えながら生きていることを知りました。私はこのような祖母の様子から、正直に言って人はこんな風に壊れていつてしまうんだという恐怖と、どうしようもない切なさを実感しました。祖母が祖母でなくなってしまうという現実を目の当たりにしたのです。しかし、そのことに一番怯えていたのは他ならぬ祖母でした。

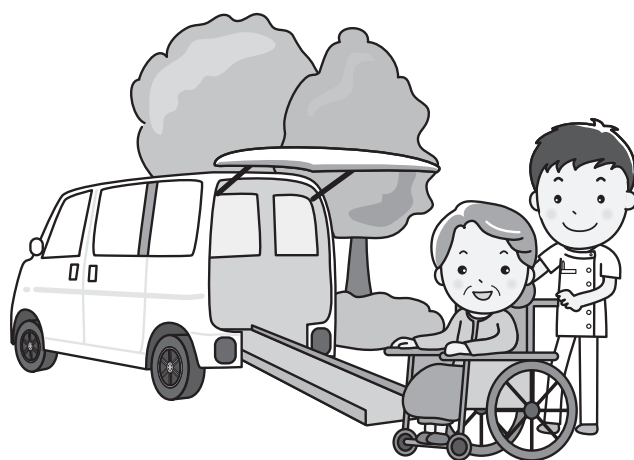
このことから、祖母の思い、そして家族の思いをありのまま受けとめることが大切なのだと思うようになりました。怖い、どうしていいのかわからない、その思いを誰かに伝え、それを受けとめる必要があると思いました。日本は今後超高齢社会の一途を辿っていきます。より多くの人が認知症になり、ケアを必要とします。だからこそ、医療や福祉の現場を変え、認知症になってもその感情を大切にしていけることができるケアが必要なのだと思うようになりました。私たちのような若い世代が、この事実としっかり向き合い、ケアの在り方を考える必要がある

と思います。

祖母は認知症になり、当たり前の生活ができなくなりました。当たり前の生活が、当たり前ではなくなる恐怖は、実は本当に身近にあるもののだと実感しました。毎日の幸せな生活が立ち行かなくなる、それは認知症に限らず、事故や病気、災害など、様々な場合が考えられます。障害を持ち介護が必要になる事も同じなのかもしれません。誰もが困らずに普通に生活することが一番です。生活の支援を必要としている方も、できれば介護や支援を必要とせず、自力で生活したいでしょう。しかし、何かあった時、一人ひとりが力を出し合い、つながり、支える。普通の生活を送れるように、一生懸命支援する。「もし自分だったら」と相手の立場に立つて考えることが必要なのではないでしょうか。人それぞれ愛の形は違いますが、みんな違うから補い合うことができるのだと思います。少しでもいいから、相手にその愛を分け与えることができる社会になれば、少しでも良い明日を送ることができるようになると信じています。

祖母は現在施設に入所しており、私の名前はまだ覚えていないと思います。でも、私の名前を呼んでほしい、またお手玉と一緒に遊びたいです。いつまでも孫として見ていてほしいし、私の最高の祖母であってほしいと思っています。認知症になつてできないことはたくさん増えてしまいましたが、いつまでもその思いと一緒に、祖母と生きていきたいです。そして、どんな状態であっても、祖母が祖母らしく生きてほしいと思います。

す。そのために今の私ができることを精一杯頑張り、より良いケアを提供していくことができるよう、介護福祉系列で一生懸命勉強していきたいです。



審査委員の感想

審査委員長 村上 嘉郎

○講 評（小学校低学年・小学校高学年の部）

今年度の福祉作文コンクールも多くの児童生徒の皆さんから応募がありました。日常生活の出来事や体験をとおして、どの作品も自分なりの感想や意見が述べられていて、思いやりの気持ちが伝わってきました。

小学校低学年の部には八編の応募がありました。その中で最優秀に選んだ作品は、病気で入退院を繰り返している三歳の従妹との触れ合いをとおして、感じたことを素直に、そしてわかりやすく表現した作品でした。病気と向き合っている三歳の従妹を不憫に思いながらも、自分よりも他人を優先する従妹の姿勢に驚き、自分と対比させて考えた点は素直で好感が持てました。そして、自分が薬を作って病気のない世界にしたいという抱負を述べるなど、自分の考えを社会や世界に向けた点には、力強い希望が感じられる作品でした。

小学校高学年の部には十編の応募がありました。最優秀に選んだ作品は、九十六歳の曾祖母との生活と学校での福祉講座をとおして「福祉」について深く考察したものでした。年を重ねて少しずつ弱っていく曾祖母を心配して自分と家族にできることや地域社会にお願いすることなど、学んだことを整理しながら思考する様子が分かりやすく表現されていて、思考力と表現力の高さを感しました。「支え合って生きていくことが福祉である」と結論を導き出して、「人を助けられる大人になりたい」と抱負を明確に表現した点が大いに評価できる作品でした。

この二作品から感じる共通点は、「深い思考」と「未来志向」の二点です。二編とも、体験したことや学んだことを踏まえて自ら思考し、自分はどうあればよいのか、そして、どうするかを表現した前向きで希望溢れる作品と言えます。いつの時代でも子供たちが未来への夢や希望を語ることは大切なことだと考えます。これからも作文に取り組みながら表現力と考察力を磨き、自分の生き方や夢、希望についての考えを確かなものにして欲しいと思います。

副審査委員長 中野善文

○講評（中学校の部・高等学校の部）

「福祉」とは、「すべての人が、精神的にも、経済的にも満たされている幸せな姿、あるいはそれを実現するための努力のこと」を意味します。

この福祉について、次代を担う中高生が、様々な学習や体験から気づき考えたことを一生懸命に文章にまとめ、多くの人に伝えようと応募してくれたことを嬉しく思います。

中学生の部には、十七編の応募がありました。どの作品も中学生らしい豊かな感性で書かれていて、内容は、子育て・介護・障がい・いじめ・多様性等の多岐に渡りました。審査においては、今年の応募作品は例年以上にレベルが高いとの評価がありました。その中で最優秀に選んだ作品は、ボランティアの意義とその価値について、自分の体験を通して読者に力強く訴える作品です。はじめは、友達がやるから、先生に言われたからやるという気持ちが少なからずあったものの、実際に多くの人の善意に触れて、自分の心の成長を感じるようになります。また、ボランティアは人や社会についての新しい気付きを与え、人とのつながりを広げるとも記しています。この作品を通して、次代を担う中高生がこれからの社会や久慈市のために何ができるかを考え、ボランティア精神を後世に繋いでくれることを期待します。

高等学校の部には二編の応募がありました。どちらの作品も福祉の実現に向けて介護系列で一生懸命に学び続けている生徒の作品で、深く心に響く内容です。その中で最優秀に選んだ作品は、支え合いの中で交わされる「ありがとう」という言葉の温かさを通して、「しあわせ」が溢れる社会がどんなに温かな社会なのかを読者に想起させます。この作品を通して、人知れず誰かのために行動し支えになってくれる人がいることを知り、実際にそのことに気づいた瞬間に「ありがとう」の言葉が自然と交わされる社会が実現することを期待します。

最後に、今後の応募作品に期待することをあげます。題材はどれも素晴らしい内容ですので、より自分の考えが伝わるような構成の工夫を考えましょう。また、書く作業を通して自分の考えを見つめ直し、新たな見方・考え方に気づくことも作文の大事なポイントです。

それでは、来年も多くの生徒のみなさんが、様々な学びや体験を通して「福祉」について考え、本コンクールに応募してくれることを心から願っています。

令和5年度福祉作文コンクール応募者・入選者

■小学校低学年の部

No.	学 校 名	学年	氏 名	題 名	賞
1	侍 浜 小 学 校	3	たむら まい 田村 茉彩	初めての交りゆう会	佳 作
2		3	なか がわ 中 川 空	大切な交流会	
3		3	すが わら かず ま 菅原 一真	はじめてのおわかれ	佳 作
4		3	み かみ ひま り み三上 陽莉	入院しているおばあちゃん	
5		3	ふな わたり り な 船 渡 莉華	ひいおばあちゃんに会いたいな	
6		3	こし ど さ な 越 戸 咲名	入いんしているいところ	最優秀作
7		3	しも むかい み ゆ 下 向 美優	うちのおじいちゃんが元気でいてほしいな	優 秀 作
8		3	く じ きょう か 久 慈 京佳	電車に乗った時とおばあちゃん	

■小学校高学年の部

No.	学 校 名	学年	氏 名	題 名	賞
1	小久慈小学校	4	うち だ せ ら 内 田 汐咲	支え合って生きていく	最優秀作
2	長 内 小 学 校	4	さ さ き らい あ 佐々木 来愛	認知症講座と二つの体験をして思ったこと	
3		4	た なか そう ま 田 中 颯真	二つの体験と認知証講座を受けて	
4		4	なか むら あ こ 中 村 愛心	初めて知った二つの体験	
5		4	たく いし れ い たく 石 怜生	認知症サポーターになって	
6		4	く どう りゅう せい 工 藤 龍成	いろいろな体験をして学んだこと	
7		4	かつ た ゆ き 勝 田 結 萩	福祉体験をして考えたこと	
8		4	あ ぼ し の ん 阿 保 心乃音	白杖体験と高れい者ぎじ体験をして	優 秀 作
9		4	く ぼ た えい と 久保田 瑛 登	高れい者ぎじ体験と白杖体験をして	
10		4	ひろ さき こころ 廣 崎 心	総合学習で学んだこと	佳 作

■中学校の部

No.	学 校 名	学年	氏 名	題 名	賞
1	山 形 中 学 校	2	しみずがわ ゆ な 清水川 結 央	みんなの居場所	佳 作
2		3	しみず そう か 清 水 想 花	障がいと共に生きる	優 秀 作
3		3	たなか いろ は 田 中 彩 遥	未来の久慈市を思い描いて	最優秀作
4	大川目中学校	1	さわぐち 澤 口 くれは	福祉体験で学んだこと	
5		2	まうち み さき 馬 内 心 咲	お年寄りでも生きやすい社会を目指して	
6	久 慈 中 学 校	1	はし ば い おり 橋 場 衣 織	いじめ撲滅に向けてできること	
7		2	まわたり のぶ き 馬 渡 信 樹	一二〇歳まで生きる方法	
8		2	こう さか ち ほ 高 坂 千 穂	忘れても不幸ではない	優 秀 作
9		2	おおむかい さ き 大 向 彩 葵	高齢者のためにできること	
10		3	おおくぼ ゆい り 大久保 結 梨	言葉一つで	
11		3	すが わら なな せ 菅 原 七 星	福祉について私が考えること	
12		3	ささき りお な 佐々木 莉乙那	職場体験で学んだこと	
13		3	かぐち ゆう な 賀 口 優 菜	多様性とはなにか	
14	長 内 中 学 校	2	さいくどう ゆ か 細工藤 由 華	幸せの数	佳 作
15		2	かき き えみ り 柿 木 笑 里	ハーモニーフォージャパンを通して	
16		1	しみず ののか 清 水 希 華	本当の幸せとは	
17		1	おくでら あや の 奥 寺 彩 乃	思いやりは幸せにつながる	

■高等学校の部

No.	学 校 名	学年	氏 名	題 名	賞
1	久 慈 東 高 校	2	つち はた み う 土 畑 心 海	福祉を感じた瞬間	最優秀作
2		2	くま がい な つみ 熊 谷 菜 摘	祖母から学んだ福祉	優 秀 作

令和 5 年度福祉作文コンクール実施要項

1 趣 旨

次代を担う小・中・高等学校の児童・生徒を対象に、福祉作文を通じて、思やりの心や助け合いの心を養い、自分たちが暮している地域への理解と関心を高めることを目的として福祉作文コンクールを実施する。

2 主 催

久慈市社会福祉協議会

3 後 援

久慈市教育委員会

4 募集内容

日常生活の中で感じたこと、考えたこと、体験したことなど。
※別添資料を参考にしてください。

5 応募資格

市内の小学校・中学校・高等学校に在籍している児童・生徒

6 応募方法

(1) 制限枚数（字数）

- ・ 400 字詰原稿用紙を使用
- ・ 小学生低学年（1 ～ 3 年生）2 枚以内
- ・ 小学生高学年（4 ～ 6 年生）2 枚以上 3 枚以内
- ・ 中学生 2 枚以上 4 枚以内
- ・ 高校生 5 枚

(2) 応募数

各小学校 10 編以内、各中学校 10 編以内、各高等学校 10 編以内

(3) 応募先

久慈市社会福祉協議会 福祉作文コンクール係

〒 028-0014 久慈市旭町 7 - 127 - 3 TEL 53 - 3380

(4) 応募期間

令和 5 年 9 月 1 日（木）～令和 5 年 9 月 15 日（木）必着

7 審 査

主催者で設置する審査委員会で決定する。

最優秀作：各部門各 1 編 優秀作：各部門各 1 編 佳作：各部門各 1 編以上
審査委員会特別賞：全部門若干

8 入選発表

令和5年11月に入選者の在籍する学校長に通知する。

9 表彰

入選者へは、主催者より賞状を贈る。

10 その他

- (1) 応募作品は原則として返却しない。入選作品の著作権は主催者に帰属する。
- (2) 主催者において入選した作品をまとめた作文集を発行する。
- (3) 本事業は赤い羽根共同募金の助成を受けて実施する。
- (4) 最優秀作受賞者に記念品（図書カード3,000円分）を贈る。
- (5) 優秀作受賞者に記念品（図書カード2,000円分）を贈る。
- (6) 佳作受賞者に記念品（図書カード1,000円分）を贈る。
- (7) 応募者に記念品（図書カード500円分）を贈る。

<指導にあたっての参考>

「福祉」の「福」も「祉」も幸せを意味しています。福祉というのは、すべての人が、精神的にも、経済的にも満たされている幸せな姿、あるいはそれを実現するための努力のことです。先生がたのご指導にあたっては、次のことがらなども参考にしてください。また、題名は統一させずに、個々の表現で書くようにご指導ください。

募集する具体的内容は

- ◇ すごく幸せな様子と、それがどのようにしてそうなったのか。
- ◇ 恵まれていない、満たされない方々の様子から考えたこと。その方々のために何をしたか。何をしたいか。
- ◇ お年寄りや身体の不自由な方々について、考えたこと。したこと。したいと思うこと。
- ◇ 差別やいじめについて考えたこと。
- ◇ 戦争や紛争や災害で、幸せでなくなっている方々について考えたこと。したこと。したいと思ったこと。
- ◇ 自然災害で体験したこと。考えたこと。
- ◇ 「福祉」について日ごろ考えていること。
- ◇ 社会問題（貧困や虐待、老老介護など）について考えたこと。したこと。したいと思ったこと。
- ◇ コロナウイルス等社会情勢について感じたこと

では、その材料は、どこから見つけるのか？

- ◇ 家族のふれあいや、出来事の中から
- ◇ 学校や友達とのふれあいで体験したり、見たり聞いたりしたことの中から
- ◇ 近所で見聞きした出来事の中から
- ◇ 地域活動、体験活動、訪問活動、交流活動などに参加した体験の中から
- ◇ 読書体験の中から
- ◇ テレビ、ラジオ、新聞、インターネットなどで見聞きした中から

令和5年度福祉作文コンクール審査委員

職 名	氏 名	所 属 団 体 等
委 員 長	村 上 嘉 郎	久慈拓陽支援学校長
副委員長	中 野 善 文	山形中学校長
委 員	北 川 儀 子	平山小学校副校長
委 員	大 槻 桐 子	久慈中学校指導教諭
委 員	中 田 悦 子	久慈市ボランティア連絡協議会長
委 員	安 部 信 二	久慈市福祉事務所社会福祉課長

令和5年度 福祉作文コンクール入選作文集

令和5年11月

社会福祉法人久慈市社会福祉協議会

〒028-0014

久慈市旭町7-127-3

TEL 0194-53-3380

FAX 0194-52-7715

この作文集は共同募金助成金の一部をあてて作成しました。